

書中 Or. 8212 (116) に *tängri ilig uirur ya* [*yan?*] なる語あり、又 *Salemann, Manichaica I. 197* に *𐰽𐰺𐰍𐰏*。

(二) 三四六頁以下に於て *Toquz Oruz* と九姓回鶻との兩名稱の關係に就きて、歐州諸學者の説を紹介したる中、*Thomsen* 氏が *Oruz* は九姓より構成せられたるが爲に *Toquz Oruz* 即ち九〔姓〕*Oruz* と稱せられたるものと見たるは正しく、*Marquart* 氏が *Oruz* は回鶻・拔野古・渾・思結・阿跌・霫等諸部の總名なりと見、*Toquz Oruz* の名は *Oruz* 中の一部なる *Uirur* が、政治上の中心點たる九姓 (*Toquz Oruz*) を構成したるが爲に生じたるものにして、従つて漢史の九姓回鶻 (即ち藥羅葛、胡咄葛等) に相當すと考へたるは誤なるべきを論述せり、これ突厥碑文に記せる *Oruz* なるものは、一に *Toquz Oruz* として記さるゝものと全く同一にして、其の間に何等區別すべき記述の存する無きを根本の據としたるものなり、然るに *Sine-usu* 碑文東面第一行及び同第三行には *Säkiz Oruz* (𐰽𐰺𐰍𐰏𐰽𐰺𐰍𐰏) 即ち八〔姓〕*Oruz* なるものが九〔姓〕*Tatar* (*toquz tatar*) の名は既に突厥碑文 II. E. 34 にも見ゆ) と結びて現はるゝを認む、即ち前者には「*Bükägük* (? *Bürgük*?) にて余は彼等に追及せり、夕べ光の沈みし時、余は彼等と戦ひて勝てり、日中に……(彼等は撃ち破られ?) 夜中に (彼等は?) 集合せり、*Bükägük* (? *Bürgük*?) には八〔姓〕*Oruz* も九〔姓〕*Tatar* も一人も殘存せざりき」と見え、後者には「第五月に彼等は余に従ひ來れり、八〔姓〕*Oruz* と九〔姓〕*Tatar* とは悉く來れり、西は *Selenga* より南は *Jilun-kol* より、*Šipbas* に至る迄、余は余の軍を配置せり」と見ゆ、之によれば *Oruz* の中には磨延曠の時代に於て此の可汗の支配の下にありたる *Toquz Oruz* の外に *Säkiz Oruz* 即ち八〔姓〕*Oruz* なるものも存在したりしこと疑ふ可きに非ず、